

「イエス」と「ノー」

岡崎東 杉田 史良

ケネディ大統領が暴漢の銃撃に斃れた時、傍らのジャクリン夫人の悲しい叫びは「オー・ノー」であった。数年後大富豪オナシスが彼女に結婚を申し込むと、今度はニッコリ笑って「オー・イエス」、また数年後、巨万の富を残して老オナシスは死んだ。この時彼女は「オー・ノー」と言っただろうかどうか、こんな話には人間的なそこはかとない。ペーソスがあつて、悲しくもほほえましい。

第一次大戦中、アラブ民族が連合軍に協力する代りにパレスチナに独立国家を建設することを認めてくれるかとの問いに対し、英国の答は「イエス」、同時にユダヤ民族の全く同じ問い同じ希望に対しても「イエス」と答えて協力を約した。この矛盾する二つのイエスによって両

者が宿命の闘争に明け暮れているのが中東の現状である。かくしてアラブやどこかの国の過激分子によってハイジャックでもおこると、その要求に対して日航機なら概ね「イエス」、ルフトハンザ機なら「ノー」である。

ロータリーではなるべく「ノー」を言わないことになつてゐる。これはクラブ運営をスムーズにし、奉仕的な考え方を育て、親睦を深めることに非常に役立つ。反面、一枚岩の統合体RIへの「所屬」意識のみが強くなり、創造的な「行動」意識は弱まつてゐる。「ロータリーアンである事」そのことが目的化してゐる。

私達のクラブも創立以来矢の如く五年の歲月が流れた。その間奉仕の理想に集う人々によつて会員は倍増の發展を見た。反面一握りの人達はクラブを去つた。M君は職場多忙のため「賜暇」で例会を一年間休まれたが、一年後過労で倒れ退会された。合理主義者M君の採られた途の可否は私には分らない。それはロータリーという限られたコミュニティーを超える問題なのかも知れないから。

「神よ願わくは我に与え給え、真実かどうかを正確に判別できる叡智と、真実なるものに対しては常にイエスと答える心の広さと、真実でないものに対してはすべてノーと答える勇氣とを」